



イモラ・スワップミートに出品された400GTと、そのオーナー親子。ナンバーはMO(モデナ)。イタリアでは所有者が変わっても車標は変わらない。新オーナーもこの粋な組み合わせを、そのまま頂けるといっわけ。

雨に濡れても

文と写真 大矢アキオ

ここ数ヶ月でボクの印象に残っている1台のフェラーリがある。

昨秋、イモラ・サーキットで行なわれたスワップミートに出品されていた400GTだ。

400シリーズは、従来の365GT/4 2+2を4823.2ccエンジンに換装したいわば発展型で、1976年に登場したモデルである。のちに『412』へとさらに発展するこのモデルの特徴は、フェラーリ初のオートマチック(実際にはGM製)が、それも標準で与えられていることであった。

いっぽうイモラに出品された“GT”は、逆に当時オプションとして設定されていたマニュアル仕様であった。

今回オーナーの希望販売価格は、3万ユーロ(468万円)という。

ところがこの400GT、会場でちょいと“浮いて”しまっていた。

なにしろ周囲に並んでいるのは、フィアット500やアルファ・ロメオ・ジュリア1300TIといったクルマたちで、いずれも5~6千ユーロ台である。こう言っではナンだが、400GTはさながら雑魚の中に迷い込んでしまった錦鯉である。町内会のカラオケ大会に突然小林幸子がやって来て、逆にみんな「引いて」しまったと想像してもよい。

そのうえフェラーリといっても、イタリアンレッドでもなければ、アメリカ人やアラブ人のウケを狙って造られた2+2である。

さらにまずいことに大雨が降ってきて、お客はこぞって中古車コーナーを離れ、雨宿りも兼ねてピットで開かれている部品市に足を向け始めた。

しかしボク個人的には、こういう激地味・安楽フェラーリが大好きである。だから翌日もボクは、恐る恐る400GTに足を向けてみた。

するとどうだ、VENDUTO(売却済み)の札がかかっているではないか。

思えば大雨の中、他の売り主たちが携帯電話番号を書いたカードをワイパーに挟んだりダッシュボードに置いて消えてしまったあとも、400GTのオーナーはひたすらパニーニを頬張りながら車内でお客を待っていた。

たとえイタリアでも、努力する者が報われるのである。

ところで、なんで400GTを売っちゃったんですか？

ボクは傍らにいたオーナーに質問した。

「他のクルマに替える足しにしたかったんだ」

他のクルマとは、彼の場合フェラーリ・テスタロッサだという。

今回なぜイモラに持ってきちゃったのかは聞き忘れたが、とにかくそんな高いものが売れたのだからめでたい。そこですかさずシャッターを押してあげたのが今回のショットである。空も祝福するかのように、静かに太陽が差し始めた。

あれから半年、彼はもう夢のテスタロッサで疾走しているのだろうか。